

「どおう、わたしが淹れたコーヒー……」

「うん、ハルさんまでに、あと一歩つてとこかな。」

でも、また里ちゃんのは、里ちゃんので違った味
がするよ」

「はいはい、田原さんの舌はハルさんのしか受け
つけないんでしょう」

「まあ、そういうこと」

「昼も『はまゆう』に入り浸っているのに、夜も
来てたら田原さんの奥さん、怒らないの？」

「コーヒーに怒ることでできないし、この年になる
と亭主は家にいない方がいいみたいだね」

田原と冗談を言い合っているうちに、また客が
入ってきた。結局、里子は何で呼び出されたのか

理由がわからないまま、田原の車で宮川を送っ
て行くことになった。

車に乗ってしばらくすると、宮川は眠ってし
まったので、何があったのか、運転席の田原に

小声で聞くと、明日ゆっくり話すから、と応えた。

約束通り次の日の昼過ぎ、田原は『はまゆう』に

やって来た。ちようど昼定食の客たちがいなく
なって、暇になったときだったので、里子は、カ

ウンターからでて田原の横の椅子に腰かけた。

「彼が奥さんと別居中ってことは、知った
かな……」

「ええ」

「実家に帰っている奥さんが、何の病気かわから
んけど、入院しとるいう連絡が向こうの母親か
らあったらしい。奥さん、彼に会いたがってるけ
ん見舞いに来て欲しいって」

「じゃあ、行ってあげればいいのに……」

「それが、奥さんとの間にいろいろあってのう
……」

こう言いながら、田原は宮川から聞いた奥さんと
のこれまでの確執について順を追って語りはじ
めた。

外国航路の船員だった宮川が結婚したのは、
三十歳のときだった。奥さんは八歳も年下だっ

たけど、なかなか子宝にめぐまれなかったので、
諦めかけていたところへ、一人息子を授かった。
奥さんから手紙で妊娠三ヶ月、と知らされたとき
は、うれしくて乗組員を捉まえると誰彼なしにい
いふらしたそうや。

船がちようど加古川に入港したとき、出産の知
らせが入り、奥さんの実家がある姫路の病院へ
飛んで行ったら、予定日より早く生まれた息子は
小さな赤ん坊で、保育器に入れられていた。顔は
彼に似て目鼻立ちがはっきりした子だったので、
自分の分身を見ているような気がして、嬉しくて
しようがなかったんやって。

ちようど息子がわんぱく盛りになった頃、彼の会

社しゃの話はなしではなかったらしいけど、母親ははおやが子連れこづでタラップを上がっていて手が離れ、子供こどもが海に落ちる、いう事故じこがあったんや。デッキから見ていた父親ちちおやが助けに飛び込んだけど、親子おやことも亡なくなったことが話題わだいになっていった時期じきがあったそうや。

大事な息子むすこにもしものことがあってはいけないので、彼は日本かれにほんへ入港にゅうこうしても、奥さんおくと電話でんわで話すだけで会あいたいのを我慢がまんして訪船ほうせんさせなかった。奥さんおくから、わが子の成長せいちょうを聞かされるたびに胸むねが熱あつくなり、すぐにでも飛んで帰りたい思いにかられたけど、彼は耐たえた。休暇きゅうかになったら、ああもしよう、こうもしよう、いろいろ想像そうぞうして眠

られない日もあったらしい。

休暇きゅうかになり、何ヶ月ぶりかで家に帰ると、身長しんちようが伸び真まつ黒くろに日焼けした息子むすこが、恥はずかしそうに母親ははおやの背中せなかへ隠れる。しかし、父親ちちおやのことを忘れてしまっているわが子を抱だき上げるまでに、そう時間じかんはかからなかった。何日かすると慣れてきて、片時かたときも彼かれから離れなくなる。そんなわが子が宮川みやがわは愛いとしくて、嬉うれしくて、瞬またたく間に時間が過ぎて行くように思えた。彼は、ずうつとこの濃密のうみつな父子おやこ関係かんけいが続くものと信じて疑うたがわなかったし、失うしなうまいと努力どりよくもし、忍耐にんたいもした。幼い息子むすこを肩車かたぐるましてプールへ連れて行ったり、自分の身長しんちようの倍以上ばいじようもある虫取り網むしとあみを持って

鈴虫すずむしを追いかけたりしたときの、何なんともあどけない姿すがたを彼かれは何枚なんまいも何枚なんまいも写真しゃしんに撮とった。船ふねに持じ参さんして乗組員のりくみいんに見せては「可愛いやろう」を連発れんぱつして、呆あきれられていた。

そんな息子むすこの事故死じこしを太平洋上たいへいようじようで知らされたときは何かの間違まちがいだと思おもったそうや。息子むすこの死しが信じしんじられなくて、何度なんども日本にほんへ帰かえろうと夢遊むゆう病者びやうしやのようになって救命ボートききうめいのところまで、ふらふら歩いて行いったときもあった。どうしようもないことはわかっていたが、そうせずにはいられなかった。ボートを下おろそうとしはじめると、後ろうしから声こえをかけられる。

あとで聞きけば、船長せんちようの命令めいれいで彼かれはいつも誰だれかに

見張みはられていたらしい。長い間ながあいだ、多くの船員せんいんを見てきたベテラン船長せんちようは、彼かれのように航海こうかい中に家族かぞくの不幸ふこうを知らされ精神せいしんのバランスを崩くずす乗組員くみいんを何人も見てきていたので、注意ちゆういしていたそうや。

彼は日本にほんに船ふねが入港にゅうこうするのを待ちかねて、取るものも取り敢あえず家いえに帰かえった。夫婦ふうふで築きずいてきた大事な家庭かていが一瞬いっしゆんのうちに崩壊ほうかいするなど、どうしても信じられなかった。しかし玄関げんかんを入はいるなり不気味ぶきみな静寂せいじやくと、部屋へや中に漂ただよっていた線香せんこうのおいが、彼かれに現実げんじつを突きつ

けた。奥さんおくに事故じこのときの状況じようきようをいくら聞いても、

自分が悪かった。自分の不注意で幼子を死なせた。だから離婚してくれの一点張り、息子が車に跳ねられたときは一切語らなかつた。

ふくよかだった奥さんの顔はやつれて皺だらけになり、黒かった頭髮も白髪が目立ちいつぺんに年取ったようになって、とても以前の彼女と同一人物とは思われなかつたそうや。でも、彼はどうしようもないくらい奥さんが憎かつた。

「大切な、大切な俺の子をお前は殺したんだ。俺がどんな思いで家族と離れ離れで暮らしていたと思つてゐるんだ。別れたいんなら、いつでも別れてやる」

そう喚きたいのを必死で抑えていたつて。田原は、

つて。離婚届けの印は一応押している、宮川の気がすむようにしてくれていい。もし離婚するのであれば、協議離婚にしましょう。荷物はその時点で処分に来るので、しばらく置かせてください。そう言い残して、母親は気の毒なほど恐縮して帰つて行つたそうや。

田原から話を聞いた二日後、松代がとうとう大阪の娘さんのところへ行き、ハルと二人になつた。里子はまだ半人前なので、店は忙しくなり、アルバイトを雇わなければ昼の喫茶か夜の居酒屋を止めなければやつていけそうにない。田原は、居酒屋を止めたほうがハルの健康にもい

ここまで話すと、水を飲みながら、

「彼の気持ち、男だつたらわかる気がするけど、里ちゃんはどう思う？」

黙つて聞いていた里子に質問をした。

「わたしは反対に、奥さんの気持ちを思うと堪らない気がするわ。宮川さん、何でもつと奥さんを慰めてあげなかつたのかしらつて……」

田原は、里子の疑問に答えるでもなく、また話し続ける。

何か言えば涙を流し、頭を下げるばかりで家事もほとんどできなくなつた奥さんを姫路で小さな旅館をしている実家のお袋さんが連れに来てくれたときは、肩の荷が下りたように思つたんや

いし、アルバイトも雇わなくてすむじゃないか、と言う意見だが、ハルは夫との思い出のある居酒屋も捨てがたいようで、悩んでいる。里子も『はまゆう』で働いていることを書いた手紙の返事が、淳一からまだ届いていないので、ハルにどうしたらいいか、助言ができていない。

子供たちには一応知らせてはいるが、自分たちのことで精一杯なのか、そんなのお母さんの好きにしたら、という返事だ。

ハルと話し合つて、一応アルバイト募集の紙を店の外に貼つておくことにした。さつそくハルが書いた達筆な募集チラシを持つて、里子が外で貼る位置を決めていたときだった。

「やあ、しばらく」

背後から聞き覚えのある声でしたので、振り向くと宮川が立っていた。

「ほんと、久しぶり、何年振りかしら？」

宮川が『はまゆう』に来てくれて、内心ホッとしているのに里子は、ふてくされたように言ってみせた。

「先日は、みつともないところを曝け出しちゃって、すみませんでした」

里子の言葉など意に介さないようなよそよそしい態度の宮川に、里子は面喰っていた。

（駄じやれのつもりだったのに、ちよつときつかったかな……）

里子は反省しながら、彼と店の中へ入った。

温かいお茶を出し、それとなく奥さんのことを聞き出そうとしたら、

「やっぱ行くべきかな……」

宮川のほうから切りだした。

「奥さんのこと田原さんから聞いたわ。出過ぎたことかも知れないけど、わたしは行ってあげるべきだと思うな」

里子は、宮川の奥さんのことが気になった。

同じ船員妻として、一年の大半を母子で過ごさなければいけなかった宮川の奥さんは、里子自身でもあるから。

「会って、どうすればいいのか、わからないんだ

……」

「とにかく見舞ってあげて。わたしからも願ひします」

「……………」

「あつ、そうだ。宮川さん、次のお休みはいつ？」

「日曜日だけど」

「じゃ『はまゆう』の定休日と重なるじゃない。わたしもハルさんに松代さんの様子を見て来てくられて、頼まれているから、いっしょに神戸へ行くっていうのはどうかしら？」

もちろん頼まれているっていうのは嘘だったが、ハルが松代のことを心配しているのは確かだ。暇さえあれば、うまく行っているかしらん、と松代

のことを話題にしている。

「えつ、ほんと。いっしょに行ってくれるの？」

宮川は、まるで初めて旅を経験しようとする子供のようだった。

（以上7月22日放送分）